

新

たな関心を得ると、見えなかったものが見えるようになる。毎日のように通っている住宅街で植栽のいくつかを新たに識別できた。ある家では玄関周りのフェンスを塞ぐように繁茂しているのがローズマリーではないかと思え、葉っぱを数本ちぎってみたらその通りだった。実家に植えたそれがまだ貧弱で活用するに十分ではないので、少々いただいたところかどうかということもあるまいなどと不埒な思いが浮かび、あわてて打ち消した。言葉の獲得と同じで、育てるとか食すといった体験があると知識も得やすく、同時に引き出される感情も複雑になる。

図書館に行っても、本の背表紙を目で追いながら、同期するタイトルが変わっているのを感じる。ついこの間もふと目にとまった『海と山のオムレツ』（カルミネ・アバーテ／新潮社）に「お待ちしておりまして」とささやかれた気がして借りて帰った。イタリアの現代小説などこれまでほとんど無関心だったのに。

同書には、聞いたことのない料理がふんだんに登場し、しかも登場人物たちが実においしそうにそれを食すので、せつかく本と出合いながら知らぬままでは済まされまいという気になる。中でも登場頻度の高いのがサルシッチャで、これも生まれて初めて聞き知った。作者の描くところから察するに、各家庭、各地域

で長年磨き抜かれた、ごくごくありふれた料理のようで、それゆえいつ何時絶品に出合うかもわからないのだ。日本料理でいえば、味噌汁とか煮染めぐらいの位置づけだろうか。

サルシッチャがどんなものか分からないままでは読み進めることもできず、ネットで調べてみた。何のことはない、ソーセージだった。正確には、焼いたものがソーセージで、焼く前、あるいは焼かずに食べるものをサルシッチャと称するらしい。生のまま食べる場合もあるという。豚肉は生で食べてはいけないと刷り込まれているので、ほんとかやあと疑ってしまうのだが、日本で生卵を食べるのと同じようなものかもしれない。懇切丁寧に作り方を教えている動画も出てきて、ついで見えてみたら拍子抜けするほど簡単だった。豚の挽肉と刻んだ肩ロース、ハーブに塩こししょうを混ぜればよいのだ。なるほど、どんな具合に混ぜるかでいかようにも味が変わるから、件の本では様々なサルシッチャが登場するわけだ。

失敗のしようがない料理なので、俄然やる気になった。スパーでちよつと赤身の多い挽肉が三十パーセント引きであるのを見つけてすっかり気を良くし、肩ロースとともに求め、ハーブを取りに実家に寄る。植えて間なしの面々早速総動員である。（この稿続く）



専門ババ奮闘記 (その2) 100

木幡智恵美

新学期 (2)

「あおい君とともだちになった」児童クラブの帰り道、寛大が言う。少しほつとする。お昼を食べさせた後、宗矢を迎えに行くと、「今日はご飯も食べられましたよ」と保育士さんに言われた。宗矢もすこしづつ慣れてきているようだ。我が家に連れ帰り、近くの公園に連れて行って遊ばせ、娘が実歩を連れて迎えに来るまで共に過ごす。娘の休みの日と土日以外、入学式までの五日間、寛大と宗矢との同じような日が続いた。寛大曰く、「児童クラブには慣れたけど、歩くのがな」。確かに、山越えは厳しい。結構距離もあり、寛大を送った帰りと迎えに行く時はショートカットするけれど、送りと迎えで万歩計は軽く一万を越している。毎日通うのは大変だ。ただ、足腰を鍛えるにはいい。宗矢も、実歩が一緒だということもあり、日に日に保育士さんに慣れ、笑顔が増していつている。寛大は入学式を迎え、宗矢も一日保育になり、私の役目はひとまず終わりだ。

そこで、やりかけていた部屋の整理を再開した。まずは、娘の部屋からだ。本棚は片付けたので、次はクローゼットの中。下段は布団やら何やらで、片付けようがなく、ちよちよこつと整理して終えた。脚立を持って来て、上段にあるものを下ろしにかかると、裁縫用の布や紐、毛糸なども、この際整理をしまおうと降ろしていく。カラー軍手で作った人形が入った袋、一晩に一つずつ、憑かれたように、毎晩夜なべして作っていたやつだ。天日干しして実歩にでも使わせよう。我が子が使っていた算数セットや裁縫セットも、部分的には使えるので、孫たちに取っておこう。あれこれ思いながら、娘が子どもの頃のためにいた小物類が入った箱を下ろすと、目の前に見覚えのある筆跡が。マジックで人形と書かれている箱三つだ。いつの間に、こんなところに運んだのだろう。全部下ろした後、箱を開けてみると、三箱とも人形がぎっしり入っていた。義母は人形が好きで、旅行に行く度に買って帰っていた。姿を見なくなっていたと思つたら、ここに押し込められていたのだ。夫に相談し、処分することにし、元の箱に入れてみると、義姉の字を発見。新婚旅行の土産に義母に買って来た日本人形だ。また、宝物が出てきた。義姉に見せると、どんな顔をするだろう。

30代フリーター やあ、ジイさん。ロシアのウクライナ侵略をめぐって、ひとつの事実を正反対に受け取る対立した見方をよく目にする。マスメディアでは、病院や学校まで無差別に爆撃し、民間人の犠牲をいとわないロシア軍の行動が繰り返し伝えられる。これに対し、たとえばツイッターでは次のような見方が語られる。「なぜNATOのように民間人子供いようと関係なく一気に空爆しない？その方がロシア兵の犠牲が少ないのに」(Mia)。戦争当事者だけでなく、第三者のほうの人たちが、なぜあばたをえくぼと感じたり、えくぼをあばたと見たりするようなことが起きるのか。

年金生活者 それらは単なる「事実認識」ではなく「感情」をともなっている。SNSだけでなくマスメディアも同様だ。前世紀末にNATO軍がユーゴスラビアを無差別爆撃した「あばた」を忘れたかのようにロシア軍の非人道性を伝えている。
なぜ当事者でない人たちがこれほど

この3D化を駆動するもの、「関係づけ」を強いるのが他者との「関係」だ。だから、喜怒哀楽といった感情はすべて他者との「関係」のあり方を表している。

30代 吉本の考えの拡大解釈じゃないのか。
年金 彼が考え出した指示表出と自己表出、空間化と時間化といった独自の諸概念は幅広い応用が利く。私はそれらをいろんなことに当てはめて考えてみるのが癖になった。「普遍視線」と「世界視線」めぐる考察も同様だ。たとえばそれを人間の死に当てはめることもできる。私たちは死の地点から生を見る視線を想定することができ、それを「世界視線」に相当すると考えることができる。

そう考え得るのは、死が生のも個性を離れて普遍性に移行することを意味するからだ。生きることはそのつど特定の場所と時間を占める、徹底的に個別的なことだ。死はその否定であるという意味で普遍性への移行として人間

「感情」に動かされるのか。戦争には第三者を当事者化する特性がある。その姿が私たちの目に立体映像のように飛び込んでくるからだ。

吉本隆明は、地上での日常的な視線(普遍視線)と上空の無限遠点からの視線(世界視線)が交差するとき立体映像が生まれると考えた。私たちが戦争のニュースからイメージするのは、地上での銃撃や地上に降り注ぐ爆弾などと同時に、どの国とどの国がどこでどうせめぎ合っているかを示す地図だ。前者は「普遍視線」に、後者は「世界視線」に相当する視線によってとらえられたイメージということが出来る。両者が交差して形成される立体的なイメージは、戦争が遠いところではなく、あたかも手を伸ばせば触れることのできる間近なところで起きているかのような生々しさを帯びる。それが第三者を当事者化し、その心の内に感情を立ち上げらせる。

30代 吉本がそう言っているのか。
年金 言っていないが、吉本自身の

にとらえられている。
個別性から離れること、普遍性へ移行することは、視点を上空へ移し、個別性を俯瞰できる高みに置くことだ。そのとき「世界視線」に相当する視線が獲得される。これに対し、生の個性の中で行使される視線は地上での視線であり、「普遍視線」に相当する。

ニュース日記 832
中村 礼治

感情の生まれ方

感情の定義と合致する。彼は、人間の心が何かをとらえるとき、まず対象と自分とを空間的に関係づけ、次に時間をかけてその対象が何なのかを了解すると考えた。「時間をかけて」と言うと、長い時間のように受け取られるかもしれないが、瞬時に近い時間だ。そして、その時間的な「了解」をさらに空間的に「関係」づけるとき「感情」が生まれる、と考えを推し進めた。

時間的な「了解」を2次元の映像と考えれば、それをさらに空間化する「関係づけ」は、その映像の3次元化を意味する。2Dのときは自分との間に距離があると感じられていた映像が、3Dになったとたんに、手で触れられるほど間近に迫ってくるように感じられる。それが感情だ。
「あばたもえくぼ」の「あばた」を2Dの映像とすれば、「えくぼ」はそれが3D化した映像だというたと思えることができるだろう。「坊主憎けりや袈裟まで憎い」の「袈裟」は3Dの映像と化した「袈裟」ということができる。

両方の視線が交差したとき、私たちは自分自身とそれを取り巻く世界の立体像を手にすることが出来る。
30代 俺はそんな像を見たことないけどな。

年金 それはラカンの唱えた鏡像段階に似ている。生後6カ月から18カ月の幼児は鏡に映る自分の姿を見て、それまでバラバラに感じていた自身の身体を初めてひとまとまりのものとして感じる。母から「ほら、これがあなた」と言葉や仕草や表情で伝えられ、自分を統一的な存在と感じて喜ぶ。このときの母の視線は「世界視線」に相当し、幼児は世界とかかわる自分の立体像を獲得する。

人間はこの視線を鏡像段階のあとでも保持しながら生きていく。それと同様に、死からの視線も死ぬときだけ出現するのではなく、生きていくあいだ起こさせることができる。そのときの自分の立体像は、鏡像段階の幼児がそうだったように、自分自身を受け入れる足がかりとなる。